

今日われ
生きてあり

神坂次郎

新潮社

今日われ生きてあり

神坂次郎

新潮社

きよう
今日われ生きてあり

一九八五年七月一五日 発行

一九八五年八月三〇日 二刷

著者 神坂次郎
こうさかじろう

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部） 03—二六六—五一二一

（編集部） 03—二六六—五四一一

振替東京四—八〇八

印刷 東洋印刷株式会社

製本 大口製本株式会社

定価 一二〇〇円



©Jirō Kôsaka, 1985
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送付
下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。

今日われ生きてあり*目次

特攻基地、知覧ふたたび——序にかえて 7

第一話 心充たれてわが恋かなし 17

第二話 取違にて 38

第三話 海の自鳴琴^{オルゴール} 44

第四話 第百三振武隊出撃せよ 51

第五話 サルミまで…… 58

第六話 あのひとたち 65

第七話 祐夫の桜 輝夫の桜 76

第八話 海紅豆咲くころ 84

第九話 母上さま日記を書きます 93

第十話 雲ながれゆく 101

第十一話 父に逢いたくば蒼天をみよ 116

第十二話 約束 127

第十三話 二十・五・十一 九州・雨 沖縄・晴のち曇 141

第十四話 背中の静ちゃん 156

第十五話 素裸の攻撃隊 164

第十六話 惜別の唄 175

第十七話 ごんちゃん 192

第十八話 “特攻”案内人 200

第十九話 魂火飛ぶ夜に 209

特攻諒——あとがきにかえて 221

参考文献 226

俺たちの苦しみと死が、俺たちの父や母や弟妹たち、愛する人たちの幸福のために、たとへわづかでも役立つものなら……

長谷川^{まこと}信少尉の日記

(沖繩天号作戦で特攻戦死)

今日われ生きてあり

特攻基地、知覧ふたたび——序にかえて

薩摩半島の最南端に、開聞岳^{かいもんだけ}という山がある。標高九百二十二メートル。薩摩富士とよばれるこの美しい円錐形の山は、裾野を太平洋に洗われ、ふかい緑におおわれた山頂から麓まで一直線の傾斜をみせた端正な山である。開聞岳の名は、鹿児島湾の入り口にあるところから「海門^{かいもん}」となり、それが転じたのだという。

四十年まえ、本土最南端、陸軍最後の特攻基地知覧^{ちらん}を出撃した特攻機の編隊は、この開聞岳上空を西南にむかつて飛び去っていった。

本土ともこれでお別れになる。隊員たちは、日本最後の陸地である開聞岳の姿を心の底に灼きつけるように、何度も振り返り振り返り凝視^{みつ}していた。なかには、万感の念^{おも}いで祖国への訣別の挙手の礼をこの山にむかつて捧げている少年兵もいたという。

開聞岳上空から沖縄まで六百五十キロ。海上二時間余の飛行。この山に別れを告げ、還らざる壮途についた特攻隊員千二十六人。出撃機数四百三十一機。開聞岳は、美しくもかなしい山である。

——昭和五十七年の夏、その開聞岳をふたたび眺め、知覧を訪ねた。三十七年ぶりの知覧への旅であった。戦後、いままでも幾度か訪ねたいと、渴くような思いをもっていた。その思いをも

しながら、なぜか心の裡に躊躇うものがあつた。戦争で死ななかつた者の、後ろめたさ、悔恨の念なのであろうか。

知覧……。薩南の涯の山のなかの静かな町。と号（特攻）要員とよばれた若者や少年たちが、青春の最後の幾日かを過した町。祖国の難に一命を捧げた隊員たちの特攻機が、二百五十キロの爆弾を抱えてよろけるように飛び立っていった町。そんな隊員や、それを取りまいた人びとの、さまざまな昏い思いが罩められている町、知覧。

鹿児島市内で一泊して、翌朝はやくホテルまで迎えにきてくれた建設業の福元勇蔵氏の車で、知覧にむかつた。飛行学校で同期だった福元は、薩摩人らしい朴質な人柄で、突然やってきたわたしのために多忙な一日をさいてくれたのだ。

鹿児島市内から涙橋……。紫原、谷山と旧谷山街道に車を走らせながら福元は、訥々とした話ぶりで彼自身の終戦を語る。

「……あれア敗戦のときの九月ンじやつた。これでもう日本軍の飛行は終りという日、濟南（中国）の飛行場の上空で、先輩の少飛（少年飛行兵）四期の飯田中隊長が九九双軽（九九式双発軽爆撃機）で、宙返りから何からみんなやつてみせた。それア見事なもンじやつた。私やそれを、いまでもよく覚えてる」

福元の耳の底には、その「最後の飛行」の爆音がいまも轟々と響きつづけているのであろう。

「濟南の空を見あげながら、飛行場の誰も彼もが「これで日本陸軍の飛行機の見納めか」と、みんなぼろぼろと涙をこぼしておつた」

それが福元の青春でもあったのだろう。わたしたちの年代では、戦争をぬきにして青春は語れないのだ。

鹿児島から一時間、手裏峠を登りつめると、いちめんの茶畑のひろがり目ななかに躍りこんできた。

(ああ、知覧だ)

左手に知覧茶発祥の地の碑もみえる。ここから道を南下すると、知覧町役場……麓川、永久橋にかかる。

町の表情は明るくなっていた。往還は舗装され、左右に建ち並ぶ家々も新しく装いを変えていた。橋の袂にあつた軍用旅館の永久旅館はコンクリート造りのモダンな、自動ドアのついた食堂「味処えいきゅう」になり、内村旅館は木造モルタル造りになり、当時の女主人たちの姿はすでになかった。所有者も変っていた。飛行兵たちが外出のたびに通った軍用食堂の「富屋」も、それに並んだ大きな富屋旅館も新築されていた。飛行兵たちがよく利用した私鉄、南薩鉄道は廃線になり、知覧駅の古ぼけた駅舎だけがぼつねんと立ちつくしていた。その駅舎の正面に打ちつけられた板片れにCHIRAN STATIONと墨で書かれているのが、歳月の流れを感じさせた。

知覧の町で、当時の面影をのこしているのは、旧鹿児島街道に建ち並ぶ、玉石や切石垣の上に犬槇の大刈込みをみせた麓の武家屋敷群と、それを縦横に結んだ小路……次の小路や紺屋小路、城馬場通のたたずまいと、軍用旅館を發つて出撃する隊員たちのために、知覧高女の少女たちがおりから満開の八重桜の枝を折りとり、折りとりして駆けつけたという永久橋畔の桜の古木。そして飛行兵たちから慈母のように慕われた特攻おばさん、鳥浜とめさんだけであった。

とめさんは健在であった。八十一歳。でっぷりと肥って、そのためか足の痛みがひどく歩行も

不自由らしかった。それでもとめさんは、訪ねて行ったわたしたちのために、杖をついて奥座敷まできてくれた。

「ゆう、おさいじゃしたなあ」

とめさんは、不作法を詫びながら畳の上に痛む足を投げだし、あのころの隊員たちの表情を、一つひとつなぞるように話してくれた。

「僕が死んだら、きつと蛭になつて帰つてくるよ」

そう言つて出撃した宮川軍曹が、翌晩、一匹の「蛭」に化つて飛んできたというのは、この左手の庭の泉水のほとりであつた。第七次総攻撃に進発した朝鮮出身の光山少尉が、出発の前夜、とめさんにねだられて低い声でアリランの歌を唄つたのは、次の間の柱のところであつた。光山少尉はその柱にもたれ、軍帽をずりさげて顔をかくすようにして唄つていたという。

「僕の生命いのちの残りをあげるから、おばさんはその分、長生きしてください」

そう言つて、うまそうに親子丼を食べて出撃していった一人の少年飛行兵のことを語ると、とめさんは、あの子のおかげで私あたやこんなにも長生きしてしもうた、と涙をにじませた。

この知覧にわたしがいたのは、きわめて短い日数であつた。と号要員でもなかったわたしは、やがて名古屋郊外、小牧第二十三飛行団司令部の通信飛行班に移っていく。わたしの知覧とのかわりは、ただそれだけであつた。が、なぜかわたしの知覧への思いはふかい。それを言うのとめさんは、

「生き残りの特攻隊員さんがおじやるようになったのも、戦後十年目ぐらいからのこつでごあんぞ」

元隊員たちが、ながらく知覧に姿を見せなかったのは、いちどそこで死を覚悟したものにとつ

て、多くの先輩や同志を失った痛恨きわまりないこの地には、訪れがたいなにかがあったのであろう。

富屋旅館で昼食をすませて発つとき、杖について玄関まで見送ってくれたとめさんは、飛び立っていく特攻機を描いた富屋旅館の日本手拭に署名して、一首の和歌を書き添えてくれた。

散るために咲いてくれたか桜花散るこそものの見事なりけり

知覧の飛行場跡は、木佐貫原^{きさぬば}の台地にある。

昭和十六年、ここに太刀洗陸軍飛行学校知覧分教所が設けられ、多くの少年飛行兵たちが巣立っていった。——が、やがて大戦末期、ここは第六航軍の特攻基地となり、そして戦い敗れたいま、台地はふたたびもとの静寂さをとりもどし、薩南の真盛りの夏の陽ざしをあびてひっそりと声もなくしずまりかえっている。

戦後、開墾された台地は見渡すかぎりの茶畑、唐薯畑、里芋畑になり、かつての特攻基地をしのぼせるのは、ピサの斜塔のように傾いた給水塔と弾痕をのこして転がっているコンクリートの衛兵所だけであつた。ほかには、なにも残っていなかった。すべてが、もとの畑地と雑木林の原に還っていた。その野の涯のはるか彼方に、開聞岳だけが遠く、当時もいまも変らぬ端正な姿をみせていた。

特攻平和観音は、兵舎跡にちかい知覧運動公園の傍に建てられていた。運動公園で車を降りて、福元とわたしは観音堂にむかった。観音堂の境内は掃き清められ、参道の左右には遺族や鳥浜とめさんや、鹿児島少飛会はじめ由縁^{ゆかり}の人びとが寄進した石燈籠が立ち並んでいた。そのむこうの、元隊員や関係者たちの浄財で建てられたコンクリート造りの観音堂には、大和、法隆寺の夢違観

音を模した金銅仏が納められている。

特攻観音に参詣をすませて、横手にある特攻遺品館に行った。

遺品館には、出撃散華した特別攻撃隊員たちの飛行帽や寄せ書、遺書や写真などが展示されている。遺品は、先輩たちのものばかりではなかった。昭和十八年四月、東京陸軍航空学校（甲種）に入校した福元やわたしなどより六ヵ月のちに学徒出陣した特別操縦見習士官や最後の少飛特攻隊員や、そして一年後に戦列に加わった特別幹部候補生の隊員たちの遺影も飾られていた。

そのなかでつよく目をひいたのは、出撃前のひととき、仔犬を抱いて戯れているまだあどけなさを残した少飛隊員たちの群像であった。第七十二振武隊・高橋伍長……荒木伍長……千田伍長……。それにしても、二時間余に迫っている確実な「死」を前にした少年たちのこの明るい表情はなんとということであろう。

当時の、陸軍の少年飛行兵や海軍の予科練習生の出身者は、愛国の情熱に駆られて、ひたすら体当り攻撃を志し、みずからすすんで血書し特別攻撃隊員になった。

へ……いま茲に殉国の翼あればたちまちにして敵の輪形陣を消滅し皇国の危急を救ひ得べきこと明らかなるを思へば、湧き上る若き血潮おさへ難く誰か生命など惜しまんや。

茲においてか簡節にして的確なる神技の訓練を重ね、一発必中を期し以て爆弾を抱いて爆弾と共に祖国の急を救はなん、いざ。この翼いま飛ばざれば何時の日国に報ゆる時あるらん（陸軍特別攻撃隊、檄文）

航空機搭乗員として、空中勤務者として若さと純真さだけが耐えることのできる猛訓練を超えてきた少年たちには、独自の死生観があった。飛行学校いらい結ばれてきた先輩と後輩の勁い絆があった。少年たちの目標はその先輩の、陸軍の撃墜王の穴吹智曹長（少飛六期、三十九機撃墜）で

あり、世界最高の超重爆撃機撃墜王の樫出大尉（少飛一期、B 29 二十六機撃墜）であり、そしてまた後輩の若鷺たち八機をひきいて出撃散華した特攻、第六十四振武隊長の渋谷大尉（少飛三期、同日任陸軍中佐）であった。

少年たちにとつて、先輩が飛んだ道、同志が征^いつた道は、誰が何と言おうとも、それが死につながる道であろうとも問題ではなかった。生死を迷うにしては、かれらはあまりにも無垢であり、至純でありすぎた。

醉生百年 夢死千年

修業二十年 散華一瞬（田中伍長遺書）

少飛は飛行弾なり（金沢伍長遺書）

ひたぶるに御楯と生きん国護るますらたけとなりて嬉しき（小高伍長遺書）

当時、報道班員として数多くの特攻隊員を見送った作家の戸川幸夫氏は、

〈彼らは神々しいまでに純粹だった。あんな美しい若者の姿を私はみたことはない〉

と述べ、フランスのジャーナリスト、ベルナル・ミローはその著『神風』のなかで、

〈この行為（特攻）に散華した若者たちの採った手段は、あまりにも恐ろしいものだった。それにしても、これら日本の英雄たちは、この世界に純粹性の偉大さというものについて教訓を与えてくれた。彼らは一〇〇〇年の遠い過去から今日に、人間の偉大さというすでに忘れられてしまったこの使命を、とり出してみせてくれたのである〉（内藤一郎訳）

と詠嘆する。

仔犬とたわむれていた第七十二振武隊の高橋伍長らが沖縄西海域に突入散華したのは、昭和二十年五月二十七日のことである。同日（四階級特進）陸軍少尉。いずれも、享年十七余。

この高橋伍長らが出撃したのは、ながいあいだ「知覧基地」だと思われていた。防衛庁関係文書でも同期生会資料でも、そう記している。が、じつは高橋伍長らが飛び立ったのは、終戦の数カ月前にできた「まぼろしの特攻基地」万世（ばんせい）（加世田市）からであった。そのころ万世基地の飛行第六十六戦隊にいたベテランパイロットの苗村少尉は、

「航空隊の特色として、どこから飛来してきては敵地に突入するということの繰り返しであったから、数日間も会った人もいれば、ただすれ違っただけという人も多く、また、特に特攻隊はいろいろの小さなグループに分れていて、母隊（原隊）がないため、突入のあとは確認の方法もない……出撃名簿に記載されていても、機関故障で不時着、生還したり、それが訂正されずにそのまま残っていたり……」

であったと、大戦終焉期の混乱を語っている。

館内に展示された隊員たちの遺品や、出撃直前の別れの水盃をかわしている写真、モンペに下駄ばきの知覧高女の少女たちが、八重桜の枝をふりながら特攻機を見送っている写真、そんなパネルを見あげているうちに、いきなり胸をつきあげてくる熱いものをおぼえ、とめどもなく涙があふれてきた。ここには、三十七年前のあの時間が、まだ生きていたのだ。

福元をうながして館を出たわたしは、特攻観音境内に建っている特攻英霊芳名碑のほうに歩いていった。碑は、台石の上に大きな衝立状の御影石を建て、その石の肌に、知覧を出撃したおび